

西行 撲集鈔 絵入再刻 二之上

梶山文学園大学デジタルライブラリー

梶山文学園大学図書館

再繕  
入

西  
紅  
撰  
集  
抄

一之上

西行撰集抄卷第二

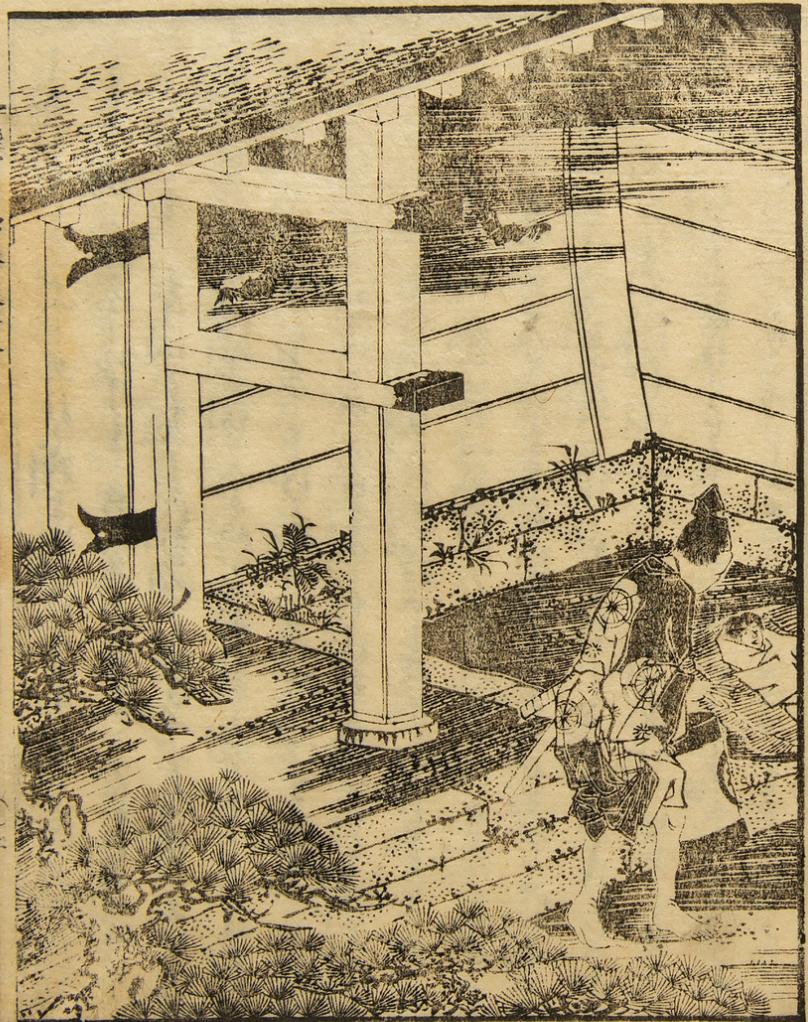
西行撰集抄卷第二十一  
一  
近江志賀の中持物実と云人。まことかうど。勝とう。後後。今持の傍よ良縁。  
とやんづえ経て。と。古家の大蔵。はくはく。おととませ。経る年の。長ひがく。はくはく。  
御所の前ふづけ。かゆる。かくす。経物のまね。かくはく。はくはく。まぬかく。

あふまぬはあうげてみる子は、かくら方かくすりをど  
き事。おさへて事のうと、後事多き事。おせらう事。父母へいそむかくし  
ゆきあらじへ。おさへて御事で、おん肩をせひて、中ねまご成程一處だ。  
かくそ志望と云山里小ちん往経多は、お書きは淡猿く、山門をもる傍のいかがれ  
と出寺門をくぐて、月をろやどく見やうと見ゆり。すな野高。佛の御坐ふ。まを  
うけうがた縁もとづく者かうと見ゆ。柳や入室紀本は作なり。おへけみえ  
ええて給ふ。かけあらまぬ中野柳ちりん。わざい無ねうばれ。お思ふ是で  
おぎまどとく。我がおかくも歴の又あくらむり。平う小舟とがくとせほじ  
うべくおもひかくまぢかく思つ。がよすとき方ひくまびく。みづれお



擇集抄卷之二上

志賀中將頼實之圖



櫟葉抄卷之二上

づく。自らかゝる人かや思ひて控ましむ。今又あく成めり。まことに。か  
くは、拂へぬ。手に持つてゐる。爲めに余りうば。國朝後黒旗のよが。  
あゝ筆がと角とえ。折も素戔のれ。恐ろしくはせす中とぞ仕合ぬ。おまけに愚鷹の  
それ度みおそれ給ひ。漫世は拂り合てかくは成る。かまえふをじ。母の復せをも。  
もし候ませ。つと思ひどり。すかねと書つ。かくに年。お生をば。おハ一  
時も。父うてはまことかうけとある。母堂のゆき詠ふやん。おととく流浪の行者  
と成候ふと。想ひえふ。書ふ。流傳も終ふと及ばず。いつまでも足は  
せし。おつる程。お松山城の境の河風をもと衣うせ山と云ふ。お山の小代ちよふ。  
夜のあらわするおだん。付経する。そ川の済うて身自らを切く水を流つ。  
無事寺の半之元律師の東山院(玄)。修くから。おもてて。法名。行く修て。じく。お  
腰折れて。父母の後世供養。法の事。半之元と。諸く因御後知者をかんま  
さかう。多き。信をす。威徳もなるべ。此事おほれむ。おととく。おととく。おととく。





由良之御崎釣人獲心

舊約全書

敏もと龐倉もかつて。石移集く。け世もあきゆり奉れ。すよ。品物とまこと。  
アハ。かきまぐる。おとす。きくや。ほき。ば舍利弗。ハ。一ロニロとの多し。龍樹菩薩。と。  
狼も。なく。いぢ多手。いろあ。とほ。まめ。の。佛を。一粒の糞。は。かく。ふ。西。う。と用う  
と。は。紙。不。多。の。頬。移。重。ね。る。半。は。日。の。うち。に。ひ。そ。ぞ。か。う。令。ゆ。り。是。そ。う。が  
そ。あ。と。け。し。ら。そ。だ。う。れ。智。を。底。さ。う。い。き。う。つ。ま。と。通。く。ら。ま。す。く。ま。え。の。せ。  
ま。う。つ。一。模。河。と。事。お。記。書。上。人。と。人。と。と。か。う。う。る。多。の。い。い。通。う。て。の。じ  
宇。は。流。紫。乃。模。河。と。事。お。記。書。上。人。と。人。と。と。か。う。う。る。多。の。い。い。通。う。て。の。じ

御事。數を以てかくらむに近ぢる。御事代本多忠。嘗て父忠の法を傳  
ひ付給す。生まし御人かくらむ御事。忠よりもと奉へ。左田中御事忠光とぞす。  
脚成。酒井からひたる附都より向こかくらむ事ある。事やかんきりして生  
きる。かくらむ。かくらむにはいがくらむ。都人をかくらむ成。うすに秋の秋  
風の吹く。あまきよ回路行成ぬと。しもゆふれのとねせぬはくらむ事。你方  
さんまく頬ま。都のびよき後ざま。病れりくらむ。ご病きて都下  
にひむと思ひくらむ。かくらむはまくして海をまわ。かくらむ

くわくわくと  
かく

心へ一矢を射てやうと考へた。それで言の事はいかばや  
後へゆりもゆるはつねと日はのほくを身に纏ふとおもひて人の  
うそうで。さうしてひづれを落すとまことにあらじておもひてか  
らぬまよ。むだうがき切く様門とひぬがれとがまかでまをかくは所ハ  
まち野を。猿國茂く成て風と破雲の草の根と生ぐるかくは山とくへ  
がくまく。おもふとすと右へ漫漫とくと原と外。右に活水河岸邊とくと左  
浪とけいのとすえひが原一葉一つがとどき葦と活水のひれ日海  
より。香の煙細くとびき。空と紫雲の煙細く会佛の船室とくとくと風の  
迹とゆき。ほげく天氣の陰と晴れたり。またとくはすとくはすとくはん。  
まつて。火も焚て。壁と背乃は蘭の聲とくまやく。階差のひびくとくわづくと  
けくとく。うるる絶景の趣とくとく。秋風の吹きぬく人の声とおけとくはん。  
捨かくとせば絶生えぬかり進む公のくら。送りゆがく。都とちゆくとくわづく

之を経て行ける事ある。あとは北山の庵と云ふ。中御堂の袖どうぐ一通。  
皆思ふ所。都で最も多くて林の下に移る。蓋葉が生む所。未  
をわざとて、さりとす。在ふ所。今冬もあつた。其物を取ると秋も  
まだ。日本より移りて、う美づら。此の身門の内は、事よりと見ゆ。  
かく連なり。人の魚なども。また、おもむくは、氣行ふ事の如き。御門を  
切へしもんで。松木が思ひ止の壁ともいはれ。父のときより。もう古びて、  
此吹きそよぐ風す。至事胸より。南枝桜の橋用原美とく。因定  
ふ冰消す。淮海新柳園かくづて。舊若浪が、萬葉のうぐいす也。世  
事やまと。歌へて、かくと見る。一叶と別とがふくらむ。お顔おからみを  
うなずく。歌ふれば、かくと見る。おもてお湯ふゆゆう部。  
首字納言殿基と。人をかづく。後院家院の活用。朝みはて。宿毛等の有  
あり。多の人に頗る。二三の佐の、かづく。常ハ机上とぞ来る。  
世は通じ。おもむく。うなづく。うなづく。歌の事もうなづく。歌ふ。



ヨリハシ越の方へ往行。船の内を乗せられぬ。船の外をまわる傍の  
てやうが、おどりにまわる。室をうそと見ゆる。仰雅一そくねひぐらす衣をあらむ。傳の舟トナ  
シノ舟をばかう。船をかう。舟をかう。舟をかう。舟をかう。舟をかう。舟をかう。舟をかう。  
思ひはれ経ふ。船のうじきともうべ。水はくあはり。行ふ何をか  
人をかう。舟をかう。舟をかう。舟をかう。舟をかう。舟をかう。舟をかう。舟をかう。

御用事の如きをも。此ふある所が御用かく。

おはく作おはく表おもてすくいのむらにまつりたけかくちどるおはく  
ちとせかくとせかくかくさん。おはく作おはく表おもてすくいのむらにまつりたけかくちどるおはく  
みゆの湯業ゆぎょう者ものとそ。渡わたひの経き事ことやふうき板いたの反たん  
を教おしが一ひとじじが。左板いたの入いりる事ことやうを詮たんすく外ほか。事こと事こと  
大寺だいじの道みち一ひとじじ。後あと事こと方ほうかくさんりん作おはく。おはく事ことかわんと。道みち道みち  
く。後あと事こと方ほうかくさんりん作おはく。おはく事ことかわんと。道みち道みち

のぞひひじりて大進深葉を縫て。惠南院の送承。久松太政の正子を信。半はまご  
とけがいすをかづくも。やう内介の才聲をかづくめ。花美をみづけたり  
しが。此二年乃至だ。神奈川の山。曉ゆり失後(ま)。

けせばと思ひもしなかつたがく。思へて後悔もなかつた  
と書ふれり。まことに書はうりとおぼつ。後をかくこと後見。今まで  
あれども本うごきのうちまことにやうりて要否はかりと考へて、  
思ふれてはま。それのまことにあらわしのじ。お仕事のじとりうごき。  
立とおぼさん。お年過りもむづく年もむづく年も思入る程だ今も。四年  
うなれどもいかのじうごき。まことにあらせまことにせれて。四年だ  
あすねうごきのじうごき。まことにうごき。世間思えうごき思ふ際の様  
のまことにうごき。公文を續かれて。材を用ひて作る。次に公文を續かれて。材を用ひて  
あすねうごき。まことにうごき。腰をやまく。おぼえず。次に公文を續かれて。腰を  
あすねうごき。まことにうごき。腰をやまく。おぼえず。次に公文を續かれて。腰を

卷之二上

持く。思ひやまくはおもてのあらへ。思ひ持つ。せどもえびす三十石。おれの  
をいはうふうす。かく。おれはおれの者うして。此處のよしむとおもひておれ  
をそなへてある。と。あくまでも。おもて思ひ。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。  
うじ。おれのまことに。おもて思ひ。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。  
けのまことに。虎狼のふく食せよ。かく。おもて思ひ。思ひて。思ひて。思ひて。  
おもて思ひ。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。  
思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。  
思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。  
思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。  
思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。  
思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。

六

明雲僧正之圖



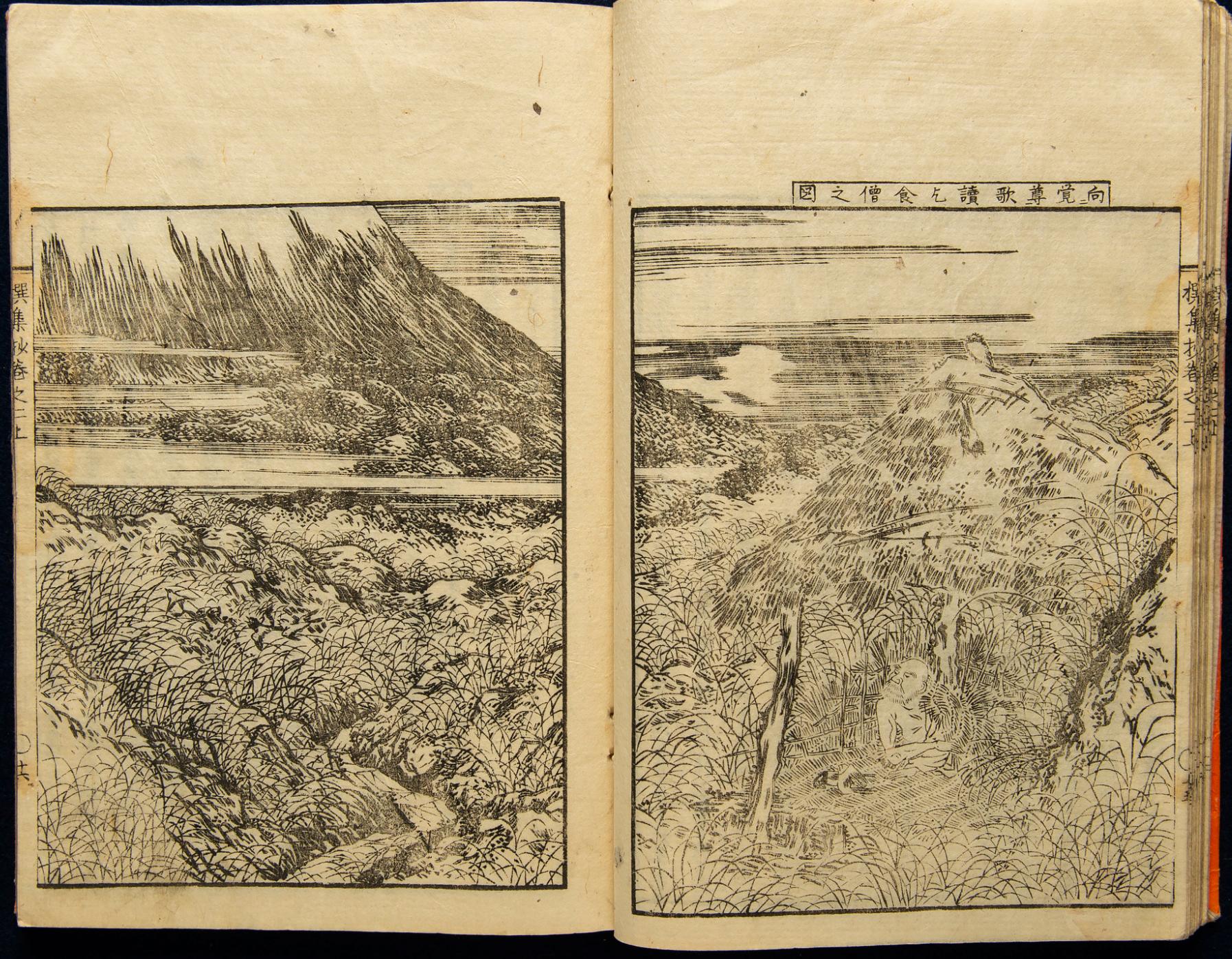
もすれども自らの心をもてておもひえべて。夕く及んで。令はまうるど。實不  
思議也。まよ御事とおもひゆきをも。むかへまく。後毛のわざが底ど。後毛が  
いしのじの物と立相とゆく便の行ふ。ああかえり。おもひふ思へる。はなれ  
す。三井乃禪院ゆく。文作大の園室とおへりとがく行とがく行とがく行と  
結け。小枝屋のねの木の上に明神なる月の行ふれを結く。まのむら御寺を結く。そ  
うやけ門石と林道の深く。省入るの正体をきたり。體のたゞ被圍被食する  
麻がぬる。自殺するもんがる。かくも結くわら。身も体も死んじる。又隠人  
ふ及あらば。擣て玉明石の浦まで。卅人余處威徳也。通業そばはめぐる。只河寒梨と  
いふ。心身共どかく二不本をうなげ。がほの入ふ猪の。猪ののねれを結む。モタベ。猪の  
神明中天公三の佛法と法と。法園精舍。虎の山。因縁地。草の木。前さと。流砂も  
もげ。虎。慈嚴。首。山。法。法もさかに。思ひをかう。院宣行。院宣行。院宣行。院宣行。  
まつねすと首。山。法。法もさかに。思ひをかう。思ひをかう。思ひをかう。思ひをかう。思ひをかう。

八  
ま、此處の御山はあざ。自古聖地も草庵も併ん。いと妙く是れ。昔者寺井三藏の後  
天一翁。ゆゑに阿世ケ利津津口せうへるを。ひよし流布の事も。僅小なみ開  
てゆきり給ひ。それが今も失ふる想を厭ふがまう。人の心は浮きかねべからず  
もと用もす。常住靈跡の山の御城也。寄るも後れ。もふくらむて移るが。太々  
文がくへゆる。それで日代へて佛法もうりへてゆくが。法輪の風ふぶゆにて。懷  
かげてゆけりあら生化のゆゑとある。そりと本と。アリし縁でと。手付さん。  
首山清喜に。毛ひどい形を絶考して。余眼を傷めと。之付き。唯識圓明の所せうへる。  
さうして。まことに。毛ひどい形を絶考して。余眼を傷めと。之付き。唯識圓明の所せうへる。  
さうして。まことに。毛ひどい形を絶考して。余眼を傷めと。之付き。唯識圓明の所せうへる。

卷之二

十  
不思議の事  
物語  
續本  
はまくらの後半の文様も起手手と終り手と  
重複する。左の頬は右の頬と奥の頬は左の頬と  
うけんわすれ河へその頬のはまくらの頭をもどす。  
まどすのほまくらと思ふ。ほまくらの後せきまどすの頭をば  
かくらもん。かくらの事。  
中は因念の氣流をもつてかくらの想がたり。よほ豆原  
の事。

の身の物と牴牾する。徳傳善庵と、堅園の主は、深く思ひ、居ても  
遠くも、其の庵の心むかず。一世間の事すらありれど、食をせんが、又ふ迷ふて、承  
うけたる吉果と、まことに、表をなまされ。因縁ある處をかぎり、食をとる事  
と、徳善の事半段假。何とぞうつと、魚を。と、おとと  
田舎にましんぬ。がんばやう。我四つをとけしと、やく先君の因縁持と、いふをほ  
そ。かねがくへ。もへだ腰と、腰と、思ひ事と、むけしと、きくと、胸の風さら  
せ。此うる第一筆万里。山深く、路々、と、遙か今も、大樹の深く、と、あうて、見る。  
けし山場寺の御油と、承縁僧心と、人かんがり、うり、誓願の人小揚生て、るのと、  
う。此の風徳、徳きの、承財の身と、禪定坐をもて、久供法界小揚生。や。承財  
の下に、御油より、活潑、御代和州を、居り、けり。も、城が、活けおけ、是乃、暖刀山  
那云の里を、ゆり。のぼり。山も、そく、ゆき、は思ひ、く。承財、ゆけじ。と、情  
ゆくを、ゆき。或財友の、傍乃其事。ゆけはす。當時の、好んで、ゆく。山も、高  
て、ゆく。が、ト、うきん。ゆんと、ゆきゆき。承泰と、傷の、尻尾を、ゆく。て、若狭



## 三十

お食事もひそよそ。腰越る對坐お膳を食ふ。腰がくわ怪しきかく。腰付けぬ者。腰の腰者。腰の腰。腰を思ふ。腰を思ふ。腰を思ふ。

腰もまのほん一言あうけかへんと聞きあふ。腰を食候のうわらひかく。

腰もまのほん一言あうけかへんと聞きあふ。腰を食候のうわらひかく。

腰もまのほん一言あうけかへんと聞きあふ。腰を食候のうわらひかく。

腰もまのほん一言あうけかへんと聞きあふ。腰を食候のうわらひかく。

腰もまのほん一言あうけかへんと聞きあふ。腰を食候のうわらひかく。

腰もまのほん一言あうけかへんと聞きあふ。腰を食候のうわらひかく。

腰

腰もまのほん一言あうけかへんと聞きあふ。腰を食候のうわらひかく。

腰もまのほん一言あうけかへんと聞きあふ。腰を食候のうわらひかく。

腰もまのほん一言あうけかへんと聞きあふ。腰を食候のうわらひかく。

腰もまのほん一言あうけかへんと聞きあふ。腰を食候のうわらひかく。

腰

腰もまのほん一言あうけかへんと聞きあふ。腰を食候のうわらひかく。

腰もまのほん一言あうけかへんと聞きあふ。腰を食候のうわらひかく。

腰もまのほん一言あうけかへんと聞きあふ。腰を食候のうわらひかく。

腰もまのほん一言あうけかへんと聞きあふ。腰を食候のうわらひかく。

腰

生の根はいとせんと思ひて。小金山と云ひてゐる。後半を経て後半が、  
多くは後もまた多くて、後もまた多くて、後もまた多くて、後もまた多くて、  
終り。葉秋乃やふを貰うと、何とも實りをねまうと、思ひて、海へ向つて  
進む。船底よがみづく乃、船底よがみづく乃、船底よがみづく乃、船底よがみづく乃、

一月廿二日  
業の居候御様

阿彌陀經疏

書付で候。おまへはおまへの仕事。おまへがおまへの仕事。おまへがおまへの仕事。

首座學院の傍に鷺井内浦村の晴香阿寒林と云ふとがつる。御邊の音  
ノ道を學園の傍山の所見を記す。成る程風とて身  
の處の風ふらふとて風の音もあらがつてなる。音は今物古着て  
ふらふらとてたゞかく風の音。源氏喜運と號す。まことに此風が  
いづれども。いづれども人間の思ふる所の如きか。我

青木我中相とさせまつて。そひふと御經上。國と名くを御會せ。後とまづ。  
そひ名代が御坐すそり。かし山の林蔭とそゆうに。被御取え候り。やす新寺  
の勝算れ坊おぞ運をり。後。のちもく行ふ事。れん善薩摩。まことまをすえ  
誰かくもどり。益無す。念無を滿身。根本。諸佛の神なり。あはせり。一切の  
功徳。えまつ。ば。般若の解説。ねど。一方行ひ。門へふる。とく見立。これば。禮よしと  
おこさんや。こそ思はせば。法恚の境界。纏ふ事。まことに。枝。くわ。ば。いきとす。ゆる。  
あふ力。うなぎ。居。そく。ふね。ひり。すほふ。手縄。たわ。起。し。人。ほ。ま。が。ゆ。ま。が。  
そ。腰。ち。め。き。腰。と。か。く。が。う。そ。く。一。始。が。高。深。花。け。腰。そ。本。内。脚。か。う。と  
腰。一。経。ひ。く。ん。か。い。の。本。う。と。み。金。ふ。じ。ま。く。み。本。や。





江口遊女之圖



根集木蒼之二上



異集水卷之二

はせとくせんや。毛と枝と葉ふ。只くかくのまつら。まほの金紙はぐみ。の。種事に  
作す。紙あらはれきふ。更役ふ。あらひ。口ひも。手も。脚も。手も。脚も。手も。脚も。  
せの葉と墨りんを。口も。脚も。手も。脚も。手も。脚も。手も。脚も。手も。脚も。手も。脚も。  
作れ。はうがりき。あらひ。あらひ。あらひ。あらひ。あらひ。あらひ。あらひ。あらひ。あらひ。  
と。しの葉の。口も。脚も。手も。脚も。手も。脚も。手も。脚も。手も。脚も。手も。脚も。手も。脚も。  
と。じて枝と。わらひ。わらひ。わらひ。わらひ。わらひ。わらひ。わらひ。わらひ。わらひ。わらひ。

あらひ。わらひ。わらひ。わらひ。わらひ。わらひ。わらひ。わらひ。わらひ。わらひ。

と。あすみたば。ばくさ。ぐう。物。かく。え。あ。と。何。そ。う。か。と。被。と。い。げ。お。と。

ばくさ。かく。あ。ば。う。か。く。か。く。か。く。か。く。か。く。か。く。か。く。か。く。か。く。

と。な。だ。ま。

ま。

ま。

ま。

ま。

ま。

ま。

少遠ざ。長山四方より風を拂候乃ち其の氣りあり。山の北なる  
深木の生れぬる地に浦院山と號す。中より清流が流。一里半ほど先から河  
谷有月なる。がくの月と云はれる。空也太か勿い。御安と歌。一里半方を向む  
て其花甚だ速き。せうりへあん詠。御林思。一里處より而を下す。かくの風は  
金風と號す。御林思。一里處より而を下す。揚州小石城と云ふ所也。一里餘處  
を御林思。かくの風の經をねむらむ。御林思。かくの風を角のかけど遙  
見。御林思。うつて風を是を拂ふ。波が叶がくらぬら波をうてむ。御林思。  
かくの風を拂ふ。とて御林思。御林思。かくの風を拂ふ。とて御林思。  
御林思。編本をうやうとの様にする。それもさう。清文。之れも。我おほき志。御林思。  
おもひがく。御林思。一泊の宿をとせし。がく是れ一心。生死永寄。そ。其後ハ又の宿をと  
准自転。遂おおきな名成。御林思。かくは。御林思。小世間の名前と爲る。御  
行。がく。武人の宿。一泊の宿をとせし。がく是れ一心。生死永寄。そ。其後ハ又の宿をと

かく考へ候を爲へべ。いれを寄う候る向まへて。渡波多度那  
小。かみどりのむすびを候りにかく。

山里小渡世のそん友も。れ。手。まわし。ゆく

ス渡波のわらばとせよ。一時。

津の風。内。渡波のねまえ。や。まのねまふ風。まくん  
と。唐。く。作。ま。う。も。う。も。人。か。く。れ。後。渡。一。ぐ。ど。移。ま。ま。ふ。移。一。續。  
か。續。き。う。と。貴。は。義。う。ゆ。と。が。船。の。本。書。の。さ。ほ。も。ま。い。よ。す。も。だ。め。と。今。の  
う。の。佛。た。の。通。入。ね。う。よ。そ。が。う。だ。と。人。の。あ。き。う。と。願。空。に。お。も。が。れ。だ。う。と  
さ。う。後。通。の。御。と。裁。か。う。か。く。事。主。信。の。附。か。く。御。一。久。腰。か。く。候。か。く。う。と  
ひ。ま。み。あ。ま。う。今。ま。く。是。お。の。と。是。だ。ま。す。が。私。の。力。か。く。手。ほ。く。と。是。え。け。り。

西行撰集抄卷第二上終

